

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02144

研究課題名（和文）数値指標中心の教育研究評価と新公共経営(NPM)の関係に関する制度論的研究

研究課題名（英文）Institutional Analysis of the Relationship between NPM and Numerical Indicator-Centered Evaluation of Research and Education

研究代表者

佐藤 郁哉 (Sato, Ikuya)

同志社大学・商学部・教授

研究者番号：00187171

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教育研究評価における数値指標が世界的規模で普及していった背景に加えて、それらの指標をめぐる誤解や誤用を取りあげ、それらが生じてくる社会的背景とその正負両面の影響について明らかにしていくことを目指した。文献調査に加えて日本国内と海外（カナダ、台湾）でインタビュー調査をおこなった。その結果、日本においてもインパクト・ファクター等の指標だけでなく、大学独自のKPIが教員の採用や昇進にあたって採用されていく傾向が見てきた。また、それらの指標の普及は、大学の設置形態や研究分野によって大きく異なることも示唆された。今後は、それらの違いを念頭において比較事例分析を進めていくことを企図している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究活動の国際化や留学生の増加、さらに高度専門職業人をはじめとする人材の国際化の要請等を背景として、日本の大学は否応なしにグローバル競争の波にさらされている現下の状況を鑑みれば、数値指標を中心にした教育研究評価はほとんど不可避の事態であると言える。しかしながら、本研究は、その「国際標準化」ないし「グローバルジャーナル点数主義」の拡大はその半面で、論文刊行ゲームの席卷に加えて研究テーマおよび方法論の面での均質化と陳腐化を招来しかねないことを示唆している。本研究は、そのような意図せざる結果を念頭に置きながら学術研究の海外発信について慎重に検討していく上での基礎的な枠組と知見を提供すると思われる。

研究成果の概要（英文）： In this study, in addition to the background of the global diffusion of numerical indicators for education and research evaluation, we also addressed misunderstandings and misuse of these indicators, and aimed to clarify the social background and both positive and negative effects of these indicators. In addition to the literature survey, interviews were conducted in Japan and overseas (Canada and Taiwan). As a result, we found a trend in Japan toward the adoption of not only impact factor and other indicators, but also university-specific KPIs for hiring and promotion of faculty members. It was also suggested that the diffusion of these indicators differs greatly depending on the type of establishment of the university and the field of research. In the future, we plan to conduct a comparative case study analysis with these differences in mind.

研究分野：社会学

キーワード：研究評価 数値指標 意図せざる結果 国際標準化

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究活動の国際化や留学生の増加、さらに高度専門職業人をはじめとする人材の国際化の要請等を背景として、日本の大学は否応なしにグローバル競争の波にさらされている。一方で、深刻化する国家財政の危機や入学志願者の減少などにもない、「選択と集中」の方針のもとに大学セクター自体の再構築と教育研究予算のより効果的な配分が求められている。

(2) 一方で、これらの動向をめぐる議論においては、大学のパフォーマンスを測り、機能分化と「選択」の根拠となる「客観的評価指標」を用いた評価方法を確立していくことが急務とされてきた。たとえば、上述の大学改革に関する議論においては、世界大学ランキングにおける日本の大学の低順位が重大な問題としてとりあげられている。また、「ベンチマーク」「KPI (Key Performance Indicators: 主要業績評価指標)」等が改革の成果を示す指標として使用されている。

(3) しかしながら、数値を客観的で透明性の高い評価指標として重視する一連の動向の中には、同じ次元で比較考量することが困難であるはずの対象に対して画一的な「モノサシ」をあてて評価することにもなう数々の弊害についての慎重な配慮が欠けている例が少なくない。また、評価や処遇に際して使用されている数値指標の中には、基本的な誤解にもとづく明らかな誤用さえ含まれている。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、教育研究評価における数値指標の普及の背景に加えて、それらの指標をめぐる誤解や誤用を取り上げて、それらの生じてくる社会的背景とその正負両面の影響について明らかにしていくことを目指した。

(2) 分析上の戦略的概念となるのは「通約可能性」である。これは、本質的に異なる性格を持っており、本来は同次元での比較が不可能とまでは言わないまでも非常に困難であるはずの複数の対象を何らかの一律の基準で比較して数値化したり格付け・順位化したりすることを可能とする判断の前提となる認識を指す。

(3) 本研究においては、日本の高等教育セクターを中心に、どのような社会的・政治的プロセスを経て特定の数値指標が研究および教育の業績評価において主流の位置を占めるようになり、また複数の対象を一律・一元的に測定・比較可能と見なす「通約化」を促す尺度として確立されていったのか、という点について、制度の生成と維持という観点が検討を進めていくことが目的となっていた。

3. 研究の方法

(1) 文献・文書資料 新型コロナウイルスの蔓延の影響により、2022年度までは文献・文書資料の収集と分析が主な研究手法となった。紙媒体を中心にして公刊されている文献に加えて、ウェブ上から入手できる各種の行政資料(審議会の議事録等を含む)が収集・分析の対象となった。

(2) フォーマル・インタビュー 新型コロナウイルスの影響により、国外は言うに及ばず、国内でもフィールドワークの機会は大幅に制限された。補助事業期間の1年延長を申請したのも主としてその理由による。それでも、2023年からはフォーマルな形式でのインタビューをおこなうことができた。その対象者の内訳は、以下の通りである—日本・カナダ・台湾の大学関係者10名(のべ)。フォーマル・インタビューに際しては、その内容をICレコーダーで記録したが、その音声記録は文字起こしの上で分析を加えられた。

(3) インフォーマル・インタビュー 上記のフォーマルな形式でのインタビューの他に、インフォーマント(調査対象者)の人々とは、さまざまな機会に会話ないし対話の形で貴重な情報を頂戴した。また、フォーマル、インフォーマル・インタビューの前後には、頻繁に電子メールや書状を通して情報を提供していただいた。

4. 研究成果

(1) 書籍および翻訳書

本研究の準備段階および中間的な成果のまとめとして、2019年11月には『大学改革の迷走』という新書を刊行することができた。同書は、専門的な内容だけでなく、新書という媒体を通してより平易な文章によって研究成果を広く社会に還元するための試みでもある。以下は、同書の章立てである。

序章 大学解体から大学改革へ

第1章 Syllabus とシラバスのあいだ

第2章 PDCA と PdCa のあいだ

第3章 学校は会社じゃないんだよ！

第4章 面従腹背と過剰同調の大学現場

第5章 失敗と失政から何を学ぶべきか？

第6章 英雄・悪漢・馬鹿

第7章 エビデンス、エビデンス、エビデンス……

以上の書籍は、主として教育研究評価における数値指標の重視（ないし偏重）の一般的背景としての大学「改革」の歴史と現状に含まれる問題点に関わるものである。一方で、助成期間中の**2022**年と**2023**年に上梓した以下の**2**点の翻訳書は、より直接的な形で、欧米における数値指標の重視とそれがもたらす意図せざる結果について扱ったものである。

デニス・トゥーリッシュ『経営学の危機』

マッツ・アルヴェッソン&ヨルゲン・サンドバーグ『面白くて刺激的な論文をかくためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方』

これらの書籍の訳出およびその過程で原著者から得られた情報は、本研究の課題をより掘り下げて検討していく上で極めて有益であった。

（2）刊行戦略としての業績ポートフォリオ

文献資料およびフォーマル・インフォーマルインタビューの結果から浮かびあがってきたのは、数値指標が重視されるような状況下において、今後日本においても顕著になるとされる「業績ポートフォリオ」とでも呼ぶことができる刊行戦略である。ここで業績ポートフォリオというのは、異なる種類の発表媒体の学術文献あるいはその他の研究業績を組み合わせた刊行戦略のことである。実際、研究評価に直結する数値指標を重視する場合には、研究者は、「業績ポートフォリオ」の形成と維持（ないし拡張）を考慮しながら研究と成果発表に関わる活動をおこなっていると考えることができる。例えば海外査読ジャーナルに論文を発表する一方で、長年の研究成果をまとめた日本語の研究書や一般書を刊行することを想定している場合には、それら複数種類の刊行物から構成されるポートフォリオの構想が念頭にあると思われる。今後の研究においては、この業績ポートフォリオの変容とその背景にある個人的・制度的条件についての検討が中心になるだろう。実際、本研究の結果は、特に日本の中堅・若手の研究者の場合は、この**10**数年ほどのあいだに刊行物のポートフォリオ念頭においた研究活動が顕著になっていることが浮かび上がってきた。

（3）数値指標重視と「国際標準化」における国および研究分野間のタイムラグ

今後、業績ポートフォリオを**1**つの鍵概念として研究を継続・発展させていく上では、比較事例研究のリサーチ・デザインが有効であると思われる。この点に関して特筆すべきは、日本と他の東アジアの国々とは、「国際標準化」、つまり海外査読ジャーナルを標準とするような制度的要請の浸透が**10**数年から**20**年ほどのタイムラグがあると思われる点である。その意味では、国際比較を念頭において事例分析が重要なポイントになるだろう。また、それに加えて同じ日本国内でも国際標準化の進展は研究分野によって大きく異なるという点も、本研究で中心的な課題となっていた数値指標重視の傾向およびその背景についてより入念な検討作業をおこなっていく上で重要なポイントになると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 74
2. 論文標題 プッシュボタン式統計調査の効用と限界（1）：3種類の不可解なグラフと改善提案の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 113-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 74
2. 論文標題 プッシュボタン式統計調査の効用と限界（2）：神と悪魔はコンマ以下に宿る？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 699-742
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 74
2. 論文標題 シラバスからSyllabusへ：研究方法論（定性）の事例を中心にして」『同志社商学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 757-781
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 73
2. 論文標題 問いのかたちと答えのかたち（2）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 73
2. 論文標題 問いのかたちと答えのかたち(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 893-919
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 73
2. 論文標題 実践型仮説による命懸けの跳躍	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 1067-1090
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 42
2. 論文標題 基調講演・大学解体から大学改革の解体へ:「崇高で高邁なナンセンス」を越えて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ikuya Sato	4. 巻 72
2. 論文標題 The Japanese University--Reformed or Deformed? I: The Myth and Reality of an All-Purpose Management Cycle	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 16
2. 論文標題 『大学改革』のやめ方：お花畑的なユートピア幻想を越えて」、『大学評価学会年報	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学評価学会年報	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ikuya Sato	4. 巻 72
2. 論文標題 The Japanese University--Reformed or Deformed II: Means-End Decoupling and Audit Failure in Policy Implementation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 35-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 72
2. 論文標題 問いのかたちと答えのかたち (1) : 疑問詞の組み合わせからリサーチ・クエスチョンの分類法を模索する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 205-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 52
2. 論文標題 誰にとっての質? 何のための卓越性? 論文掲載をめぐるゲームとゲーミングの構造	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 組織科学	6. 最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 71
2. 論文標題 Syllabusとシラバスのあいだ：大学改革をめぐる実質化と形骸化のミスマネジメントサイクルを越えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤郁哉	4. 巻 71
2. 論文標題 Impacts of Non-Academic Research Impact: Toward a Tripartite Model of Research Assessment	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 87-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤郁哉
2. 発表標題 大学改革のミスマネジメントサイクルに関する制度論的分析
3. 学会等名 組織学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤郁哉
2. 発表標題 大学改革から大学改革の解体へ
3. 学会等名 大学教育学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤郁哉
2. 発表標題 リサーチ・クエスチョンの作り方と育てか
3. 学会等名 日本商業学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤郁哉
2. 発表標題 『経営学の危機』を越えて
3. 学会等名 組織学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐藤 郁哉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 352
3. 書名 ビジネス・リサーチ	

1. 著者名 青島 矢一（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 白桃書房	5. 総ページ数 172
3. 書名 質の高い研究論文の書き方（担当：「誰にとっての質？ 何のための卓越性？」（pp.54-72）	

1. 著者名 佐藤 郁哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 480
3. 書名 大学改革の迷走	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------